

以降も新梢管理を行う慣行区と、果実軟化期以降は新梢管理を行わない省力区を設け、1新梢あたりの副梢切除回数および作業時間を計測した。

慣行区では、摘心した副梢葉の付け根から再伸長した副梢の切除に労力がかかり、1新梢あたり合計7.7回切除し、10aあたりの新梢管理作業の時間は56時間かかったのに対し、省力区では1新梢あたり副梢の切除が4.2回で、10aあたり22時間となり、約62%の省力となった(表-6)。また、果実品質への影響はなく(表-7)、翌年の花芽への影響も見られなかった。

## おわりに

以上の結果から、「シャインマスカット」の短梢栽培では果実品質を低下させることなく、上記省力技術が利用でき、5～7月の10aあたりの作業時間は242時間から157時間となり、約35%の省力化が可能であることを明らかにした(図-6)。なお、本研究は、食料生産地域再生のための先端技術展開事業「被災地の早期復興に資する果樹生産・利用技術の実証研究(平成24～26年)」(農林水産省)で行ったもので、平成27年度より宮城県の被災地で実証試験が行われている。群

馬県においても平成27年7月に生産者向けの研修会を開催するなど、技術の普及に取り組んでいる。今後はさらに栽培上の無駄を省き、ブドウ農家の経営向上を図ることが望まれる。

## 引用文献

- 工藤信 2007. ブドウ‘シャインマスカット’の無核栽培における花穂整形法と果実形質. 東北農業研究 60, 127-128.
- 社団法人山梨県果樹園芸会 2007. 葡萄の郷から. 54-55pp.
- 田村史人・村谷恵子 2008. 12月加温作型のブドウ‘マスカット・オブ・アレキサンドリア’における夏季および秋季の窒素吸収量と新梢成長, 果実品質および収量との関係. 園芸学研究 7(1), 75-80.
- 葉師寺博ら 2008. 新規道具を利用したブドウ花穂整形の省力化. 園芸学研究 7(1), 81-86.

## ななくさ (七草・七種)

(公財)日本植物調節剤研究協会  
兵庫試験地 須藤 健一

せり なずな ごぎょう はこべら ほとけのぎ すずな  
すずしろ これぞななくさ

万葉集にこの歌はない。万葉時代、これら七草(ななくさ)は春先の田や畑、丘に畦に生えていたであろうに、芹を除いて詠まれることはなかった。

これら七草が特定され、一般的になったのは鎌倉時代と言われている。

せりは文字通り芹。なずなも薺。はこべらは繁縷。ごぎょうは滑莧、牛蒡、鬼田平子、母子草など諸説ある。滑莧も牛蒡も春(陰暦の正月)の若芽は考えにくいことからすると鬼田平子か母子草。ほとけのぎを小鬼田平子、仏の座、胡瓜草、耳名草と、これまた歴史をひもといて諸説唱えられる。一般には、牧野富太郎が主張した小鬼田平子だと言う人が多い。とすると、ごぎょうは母子草が採られることになる。すずな、すずしろはそれぞれ蕪、大根とされるが、これにもすずなを野蒜、すずしろを嫁菜とする説もある。これらを炊き込んだ「七草(ななくさ)

粥」は、年末年始に疲れた胃を休め、青菜の少ない冬場に不足しがちな栄養素を補って「無病息災」を願った風習として続いている。

万葉集の中の山上憶良が詠んだ歌2首、

秋の野に咲きたる花を およびをり かき数ふれば  
七種(ななくさ)の花(巻8:1537)

萩の花 尾花 葛花 瞿麦の花(なでしこのはな) 姫部志(をみなへし) また藤袴 朝貌の花(巻8:1538)

こちらは「秋の七種」。すべて食べられない。花野を歩きながら、これらの花々を眺めるものである。

「おすきなふくは」(お:女郎花, す:薄, き:桔梗, な:撫子, ふ:藤袴, く:葛, は:萩)と覚える。藤袴は今や絶滅寸前と言われるが、七草(春)にせよ七種(秋)にせよ田圃や畑、その周辺に生える「雑草」と言われるものばかりである。古の人たちは、これらの草草に親しみを持った目をむけていた。